

小学生時代に母と観た映画の思い出

二十八回生 池島 正員

私の人生に影響を与えた映画は、戦後の大衆娯楽を担ってきたと確信しています。

私は、両親、祖母（母方）の影響で映画大好き人間となりました。映画好きになった当時の状況に少し触れ、中でも、小学生低学年の頃に母親に連れられて、観た映画が十分に理解できなく、大人になっても気になっただけの思い出です。

我が家は、戦時中に私（昭和19年生まれ）を妊娠した母とともに、4歳の頃まで、和歌山市内の祖父母の家（実家）に疎開していました。

小中学生の頃は、3歳上のいとこがいる叔父・祖母の実家に春・夏・冬の長期休みには世話になっていました。小学生の頃に、その実家の裏の近所に映画館（2、3本だて映画館）ができ、迷惑料？で招待券が配られ、

祖母と二人で弁当持参の映画館通いをしました。片岡千恵蔵、大友柳太郎、市川右太衛門、中村錦之助、美空ひばりなどの東映系、市川雷蔵（大映系）等々の活躍した時代です。これらの邦画は、大半が勸善懲惡の世界を扱っていて、小学生にも理解できるところが多かったように思います。

中学生時代には、和歌山のいとこ（3歳上の高校生が引率者）と二人で映画を観に行きました。いとこは石原裕次郎のファンで、引率者の顔を立てて、上映中は裕次郎映画を観ました。裕次郎以外では、大概、西部劇が主だったと記憶しています。

高校では、映画研究部に入り、他校との協議会などに参加し、推奨する映画のために、大阪の難波（道頓堀）の映画館「松竹座」に、よく集まった記憶があります。そこでは、大島渚監督の「青春残酷物語」、小林正樹監督の「人間の条件（仲代達也主演）」などが放映されていました。あまりに、映画鑑賞に熱心だったせいか？部長を指名されました。そんなこともあり、単独で映画館に行くことは黙認されていた高校時代は、映画好きが高じて、土曜日の下校途上に吹田駅で下車し、見つけた洋画館で、時々、観て帰ったものです。

そこで記憶している映画は、ロバート・ミッチャムの「眼下の敵」、マイケル・ランドンの「トム・ドゥーリー」、ラナ・ターナーの「青春物語」、アンソニー・クインの「道」などが記憶にあります。トム・ドゥーリーはキングトントリオが歌った主題歌の方が有名になり、マイケル・ランドンは後のTVシリーズの「大草原の小さな家」などTV関係で活躍しました。

その様な青春時代の生活ぶり、大学を一浪し、予備校に通う身となりました。その入学金、授業料を払うために父親と出かけた帰りに、梅田シネマでジョン・ウェインの「リオ・ブラボー」を観ました。父親からは、「この1年は、これを最後に受験に専念しなさい」と釘を刺されたことを思い出します。

千里第二小学校時代の思い出として、多分、校庭（分校？）だったと思いますが、大きなスクリーンを設置して、一般の人を交えての屋外での映画鑑賞が行われた記憶があります。真偽のほどは不明ですが、当時、居住していた「府営豊津アパート」に同級女子（鶴崎さん）のお父さまが映画関係の偉いさんで、関与していたと聞いたことがあります。鶴崎さんは6年生（5

年生？）の半ばで、ハリウッドのあるロサンゼルスに移られました。

また、学校の行事として、デイズニー映画（「ダンボ」、「砂漠は生きている」）の鑑賞会などがあったことが思い出されます。

今回の寄稿は、こうした環境で映画を観る機会が多かった自分の脳裏に今も不可解なまま残っていた小学生時代に母と見た映画があり、その思い出です。

小学4年生頃だと記憶しますが、梅田に母親と二人で買い物に出かけた帰りに、音羽信子主演の映画を観ました。私鉄勤務の父親の関係で、宝塚大劇場・中劇場などがある宝塚遊園地（後の宝塚ファミリーランド）によく連れて行ってもらい、動物園の他、大劇場（宝塚歌劇）、中劇場（漫才）を観て帰ったものです。そのようなことで、元宝塚ジェンヌに関心があったのでしょうか？母親は、越路吹雪とか、音羽信子を機会があれば話題にしていました。母親はどうしてもこの映画を観たかったのでしょうか。百万ドルのえくぼを持つと言われた、主役の音羽信子が初めての汚れ役を演じた「どぶ」（新藤兼人監督）という映画でした。新藤

監督の本映画に対する思いは、50歳半ばころ入手したDVDのパンフレット（一部抜粋）を参考に後述しました。

「ツル」は、京浜工業地帯の川崎、鶴見地区の沼沢地（映画では「河童沼」）を参考に、バラックを住居にしたルンペン部落が舞台となっています。そこには、競輪狂のピンちゃん（宇野重吉）と徳さん（殿山泰司）が共同生活していました。一方、少し知恵遅れの主役のツル（音羽信子）は、不景気で労働争議を起こした紡績工場（秩父）を首になり、他の地区に職探しに旅に出た途上、貰った退職金千円を暴漢に奪われます。文無しのツルは、その後、騙されて娼館に売られ、この待遇の悪さから集団脱走し、追跡を振り切り、このルンペン部落近くで、一人、行き倒れとなりました。一夜明け、工場勤務途上の徳さんに弁当のパンをもらい、救われ、徳さんのルンペン部落を訪ねます。徳さんとピンちゃんらの共同生活に加わります。それはツルが娼館で稼いだ千円を持っていたからです。その後、徳さんとピンちゃんはルンペン部落の役者崩れの一人の悪巧みに乗り、ピンちゃんが大学生と偽り、卒業す

す。その後、現れた警官にツルは射殺され、その遺体をルンペン部落の人たちに引き取られ、通夜が営まれます。

その時に、ツルが小説家願望で書き残したものを預かっていた住人（若い女子勤務者）に披露され、学業に励むと騙したピンちゃんに「学生服と靴」のツルからのプレゼントが宅配されます。ツルはピンちゃんが好きでしたが、性病に罹っていたため、ピンちゃんを拒否したことなど、ツルの善意の気持ちや純真さをこの時に気づき、一人泣き伏します。そのようなストーリーです。

ツルがなぜ行き倒れたのか？何故パンパンになったのか？「パン助」などの会話のことはや、性病の意味、何故このような生活をしているのか？などなど、理解できない部分が多く、母親に何度も鑑賞中に質問をしました。周りを気にした母親には、「静かに、黙って観てなさい！」としかられ、説明はもらえませんでした。

その理解不十分の状態で分かったことは、ツルはピンちゃんに好意を持っていたこと、ピンちゃんはツル

るのに金が要ると騙し、ツルは料亭の接待婦になります。そこで客と一緒に酒を飲み、羽目を外して客に被害を与えて首になります。その賠償金が必要になり、駅前（川崎駅辺りがロケ地）で売春婦（パンパン）になり、金を稼ぎます。

金を稼ぐツルにルンペン部落の金に窮している連中は金を貸して欲しいと求めてきます。この映画の理解の難しいのは、金を貸してと求めてきた場面はあるのですが、貸したことが分かる場面はありません。そういう人たちに慕われているツルがいるということ、理解すべきということなのでしょう。前述の祖母と通った映画とは異なり、子供に理解できる筋書きにはなっていないところが多く、不可解さを抱えての鑑賞でした。

ある日、ツルは、好意を抱いているピンちゃんに性的に挑まれましたが、それを拒否し、ピンちゃんに共同生活から追い出されます。

追い出されツルは、金稼ぎをしている駅前にたどり着いたところ、他のパンパン集団に因縁をつけられ、リンチされます。駅前交番に逃げ込んだツルは、警官が不在で、壁に掛けられていた拳銃でツルは応戦しま

を馬鹿な（考えの足りない女と思い、利用することだけを考えていました。ツルが死んでから、彼女の純粋で、善意な行動が分かり、ピンちゃんは自分の考えの足りなさ、悪意の行動を思い知ったことです。

この映画鑑賞後、母親からは児童向け映画以外は2度と連れてもらえませんでした。

社会派の新藤監督は、観客に考えさせるところを残して映画製作を行っているところがあり、小学生には題材も筋書きも難しすぎる映画でした。また、母親が幼い息子に鑑賞させるにはいかなものか？という映画でもありました。消化不良のまま50歳半ば頃まで気になっていましたので、DVDで再鑑賞しました。

高校生時代に観た、同時期のイタリア映画のフェデリコ・フェリーニ監督『道』（ジュリエッタ・マシーナ、アンソニー・クイン）と同様に、（生前は気づかずにはいた純粋さ、誠実にピンちゃんが気づき、善の考えを取り戻し（想像）、涙するところは似ています。しかし、観客に感動を与えるという点では、「道」が優れているように感じています。

新藤監督のこの映画に対する思いを「DVDのパッケージ」を引用（一部抜粋）し紹介します。

『わたしは逗子に住んでいたのですが、東京へ出るには横須賀線を利用していた。……横須賀電車が鶴見駅を出て、次の川崎駅に向かう途中、鶴見川の鉄橋を渡ると、左側に一面の沼沢地がひろがり、葦の生い茂る沼があつて、そのほとりにブラック建の小屋みたいな家が数軒あつた。

私はこの風景にひかれ、その侘しさが戦後風景を象徴しているように思え、ある日のこと、ここを訪ねた。……

私はツルという一人のあたまのうすい少女を連れてきて、戦後の人間風景を戯画化してみようともくろんだ。

人は善意もあるが悪意もある。善意よりも悪意のほうが多くて、それに本能的に気づいているから、善意を行いたいと思つているのだろう。自分が生きて行くためには、他人より努力すればいいのだが、努力はなかなかむつかしいので、生きるため他人の邪魔をしたいと思う。……この汚れた世間の荒波を泳いで行くには、自分だけを可愛がらねば、生きていけ

の徳さんの被る作業帽に「NKK」の文字が入っているのには驚きました。

新藤監督は戦後の風景の戯画化の試みを行ったと言っています。

私の居住した、和歌山市や池田市は戦災を感じさせる、例えば、和歌山市では城郭が焼失し、池田市では駅前（阪急）に傷痍軍人がいたなど、その傷跡を残していた印象を持っています。一方、転校してきた千里山地区は戦争とは無関係の別世界のようにでした。

当時の記憶を頼りに寄稿しましたが、記憶違いがあるかもしれません。屋外での映画鑑賞など、記憶が不確かなため、懇親会の席で関係する情報をいただける機会があれば幸いです。

本寄稿のため、レンタルビデオショップの会員となり、「道」など再度DVDを観て確認し、当時の思い出にふけるとともに、映画好きだった自分を再確認しました。

完

なのだ。

しかし、わたしの主人公の少女は、あたまのはたらきが少し鈍くて、俗臭を受け取るだけの妥協性がないから、善を善と見、悪を悪と見、人を疑わない、つまり純粋なのである。それならば、この世に生きているまっとうな人は全部悪意に満ちているのかというと、残念ながらそうなのである。

そのことは、なかなか日常では同類同志で生きているから判別しがたいが、少女と比較することで分かってくる。……

パンフレットでは、監督が素晴らしいと思ったツルのメーカーが音羽ファンに不評だったこと、駅前（川崎駅裏側）の撮影余話、映画予算が経済的に切迫していた話題なども語られています。

私にとって、『どぶ』に出てくる「ルンペン部落」のような環境・生活は別世界でした。この時代背景として、製鉄業の鋼材拡販のため建築技術者として勤務した私には、DVD鑑賞後、この時代背景にある製鉄・製鋼業のストライキの話題には興味がありました。寄稿のために再々鑑賞したDVDで東亜製鋼所の従業員



ツルと徳さん



ツルの通夜



ツルとピンちゃん



ツルの仕事着スタイル